京都なぜ「通」あって「筋」がない

平安京、縦横区別せず

大阪・神戸「通」に沿って街拡大

後から道つなぐ「筋」発展

謎解きクルーズ

大阪出身の記者は東西に走る道路を「通（とおり）」、南北を「筋」と呼ぶのは常識と思っていた。だが先日、京都市内を歩くと東西も南北も通だった。全国的には通と筋を使い分ける方が少数のようだが、神戸は大阪同様、通と筋がある。同じ関西の三都で道路の呼び方が違うのはなぜだろう。

まず京都市歴史資料館に向かう。研究員の井上幸治さんは「中世までの京都では道路を通とは言わず『大路（おおじ）』『小路（こうじ）』と呼んでいた」と教えてくれた。井上さんによると、平安京の条坊制という都市計画では大路が幅8丈（約24メートル）、小路が同4丈（約12メートル）ときっちり区画されていた。

「その後、自然発生的に人々が通と呼ぶようになり、江戸時代までに定着したようだ。東西と南北でなく幅で区別していたからでは」と井上さんはみる。古来、縦横の呼び方を分けていなかったから、通に統一されたのだろうか。

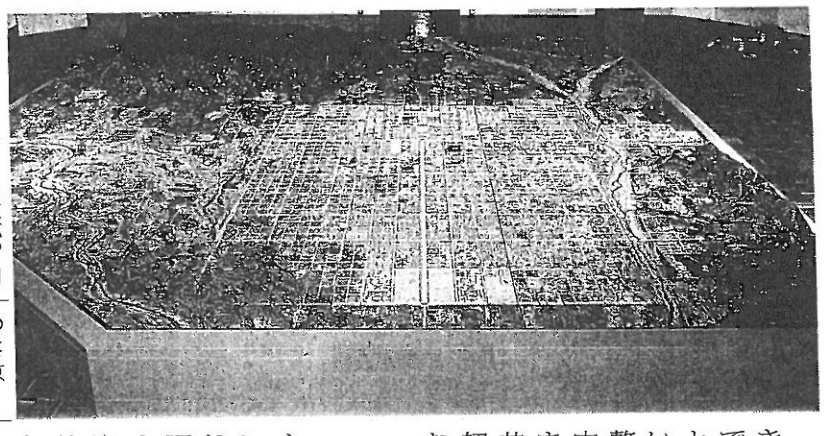
＃　＃　＃

続いて大阪市史料調査会を訪ねた。調査員の古川武志さんは南北に広がる上町台地から西へと発展した大阪の歴史が要因だとみる。上町台地の北端には石山本願寺があったが焼失し、豊臣秀吉が大坂城を築いた。大坂城から西へ開発が進み、中央大通など東西に伸びる道と町並みが同時につくられた。長堀通や千日前通も、町と一緒に西へ伸びていったという。

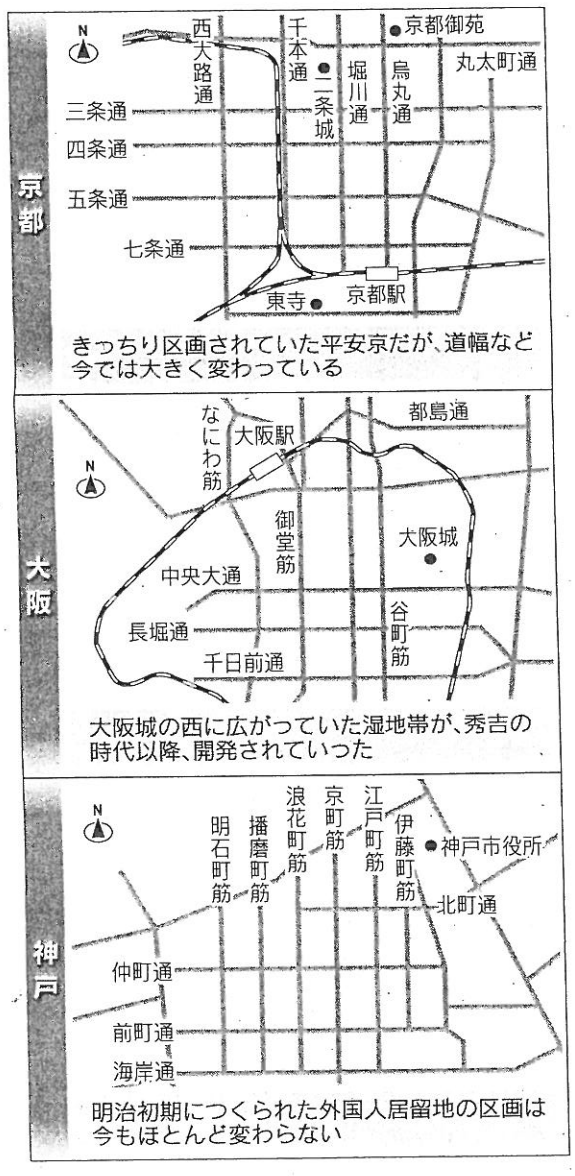
「通とは町そのもの。一方、筋はあくまである場所へ向かう道のりであり、通とは別物だった」と古川さん。堺筋、心斎橋筋などは堺や心斎橋へ行く道ということだ。「御堂筋はもともと北御堂と南御堂へ向かう短く細い道だった。御堂筋の北側はかつて淀屋橋へ続く道ということで淀屋橋筋と呼ばれていた」

京都へ戻り、平安京の復元模型が展示されている京都市平安京創生館を訪ねた。案内ボランティアの小室博さんは「古い史料では現在の新町通は町尻小路、町小路、町尻通などの呼び方が混在。市場が立ち並び、人が集まる栄えた町だった」と解説してくれた。

徐々に発展し、新しい道路ができた大阪と違い、すでに区画整備された平安京が1200年間に姿を変えながら、自然発生的に既存の道路の呼び名が定まっていったのが京都といえそうだ。「御池通も神泉苑の池に続くから付いた愛称。由来をたどると大阪の筋に似た例もある」と小室さん。



京都市平安京創生館の大路・小路で区分けされた平安京の模型（京都市歴史資料館提供）



きっちり区画されていた平安京だが、道幅など今では大きく変わっている

大阪城の西に広がっていた湿地帯が、秀吉の時代以降、開発されていった

明治初期につくられた外国人居留地の区画は今もほとんど変わらない

神戸市立博物館にやってきた。江戸時代までは小村で、大きな道といえば近畿と九州を結ぶ西国街道くらいだった神戸。明治初期に整備された外国人居留地を中心に、国内外から人が集まり発展した。学芸員の田井玲子さんは「居留地も最初は筋や通という呼び方はなかった」と話す。

＃　＃　＃

なぜ筋と通を使い分けるようになったのか。「新しい町並みをつくるに当たり、東西と南北を分ける大阪にならったのでは」と話すのは神戸外国人居留地研究会の高木応光さんだ。名前の由来は「筋については、主要都市を引用し、東から江戸町筋、京町筋、浪花町筋……と付け、中央の京町筋が全体を貫く配置になった」と教えてくれた。

すると大阪とは逆で筋がメーンで、通がサブなのか。「いいえ、やはり神戸の発展も通が中心。東西に伸びる西国街道が古くからあり、居留地も海岸通だけは初めから通が名前についていた」と高木さん。

中世までに都市構造がある程度完成していた京都に対し、大阪と神戸は近世以降に発展し、町並みが大きく変わった。新しい都市で筋と通を使い分けるのは道案内にも便利で、合理的だ。道路の呼び方から三都の歴史を捉え直すのも面白いだろう。

（大阪・文化担当　安芸悟）